

希望を

兄の生きてた記憶糧に

阪神大震災で神戸大大学院生だった兄の競基弘さんを亡くした岩瀬朗子さん(四二)＝名古屋市緑区＝は十七日、神戸市灘区にあった兄の下宿跡を訪れた。あの翌年から、欠かしたことの無い追悼の時間。今では、基弘さんの名から一字を取った長男の樹弘君(二〇)も一緒だ。「あつという間に二十年たちちゃったね」。ずっと二十三歳のままの兄に語りかけた。(木下大資) ●面参照



競基弘さん

震災後にできた新しい一戸建てやマンションに囲まれ、地元の子どもたちが遊ぶ公園。その北西辺りに、かつて基弘さんが暮らした

木造二階建てのアパートがあった。「おじちゃんのおまわりしようね」。樹弘君に声をかけ、母恵美子さん(六〇)が持参した遺影に花束を手向けた。

「お兄ちゃん大好きっ子」で、高校や大学が休みのたびに神戸へ通った。アパートは兄の友人らのたま

り場で、訪れると「競の妹が来たよかわいがられた。二十年前の一月十七日未明に襲った揺れで、アパートは倒壊。一階の部屋で寝ていた基弘さんは下敷きになり、ほぼ即死だった。

翌十八日に父の和巳さんと名古屋から駆けつけた朗子さんは、一階が押しつぶされているのを目にして「半狂乱になった」。消防隊員ががれきから兄の遺体を運び出した後、検視を待ちながら遺体安置所で二日間、ぼつぜんと過ごした。今でもテレビで震災の映像が流れるたび、くしゃくしゃになったアパートや、毛布にくるまれた兄の遺体が脳裏によみがえる。

和巳さんは三年前にがんで他界した。十七日早朝に神戸市内で開かれた追悼式典には恵美子さんが一人で参列し、朗子さんは足が向

かなかった。「私にとって

兄の思い出は、このアパート跡にあるから」毎年、一月十六日の夜には基弘さんがアルバイトをしていた居酒屋に当時の仲間たちが集まる。二十年続く恒例行事で、この間に生まれた子どもたち専用のテーブルができた。「競は朗子ちゃんの誕生日には必ず電話をかけた」「妹とい

「兄のいろんな人とのつながりを、今も感じられる」と朗子さん。ロボット研究に取り組んでいた基弘さんの犠牲を忘れまいと、当時の指導教官らが創設した「競基弘賞」は、今年で十年の節目を迎える。災害

東日本大震災の発生時刻に合わせ黙とうする人たち＝17日午後2時46分、神戸市中央区の東遊園地で



追悼の集いが行われた神戸中央区の東遊園地では、早朝灯籠を並べた「1995」の文字が輝き続け、午後3時、本大震災が発生した日「3」並べた灯籠にも灯がともった震災の遺族らがともに冥福を祈り、絆を確かめた。東日本大震災が発生した

二つの大



競基弘さんが亡くなったアパート跡で手を合わせる(左から)妹の岩瀬朗子さん、おいの樹弘君、母恵美子さん＝17日、神戸市灘区の六甲風の郷公園で

震災 祈り一つに

戸市中
から竹
1・17
は東日
・11と
た。二
犠牲者
合った。
時刻の

午後二時四十六分には、この日二度目の黙とうがささげられ、広場は夜まで多くの市民らの祈りに包まれた。
宮城県名取市閑上地区の仮設住宅の住民らも参列。津波で妻を亡くした木皿俊克さん(五七)は、神戸からボランティアに訪れる市民と交流を続けている。「同じ被災者どうし特別に親しく思える」と話す。神戸の被災者からは、震災のことを話し続けることが風化を防ぐために必要だと教わった。「二十年、さらに先に記憶を継ぐためにもっと神戸から学びたい」と感じている。

東北への支援を続け、今回、木皿さんたちを迎えた神戸市垂水区の長岡正明さん(七六)は、二十年前には自宅が倒壊。「全国の方に本当に世話になった。恩返しするのが当たり前」と笑顔を見せた。

(森耕一)



対応に役立つロボットの優れた研究に贈られる賞で、受賞者には、東日本大震災や原発事故への対応で活躍した人もいる。

朗子さん自身も、二〇〇

九年に「オフィス・モトヒロ」の名で子育て支援の講師業を始めた。「兄の生きた記憶を残したい」との思いからだ。

樹弘君は、会ったことのないおじに「一回、会ってみたかった」と言う。遺影に手を合わせた後、一緒に下宿跡を訪れた基弘さんの友人の子どもたちと仲良く遊び回った。「競の家に明るさと希望を取り戻してくれた存在なんですよ」。朗

子さんは、笑顔で見守っていた。